

中日間における「教育」の近代化

聶 長 順

はじめに

「教育」という語は、「得天下英才而教育之、三樂也」（天下の英才を得て之を教育して、三樂なり）という『孟子 尽心上』の一文に起源があり、長い歴史を持つ。教誨・培養という意味である。「教育」の近代化とは、洋学伝来の際に Education という西洋近代概念を受容し、教育学の中核的な術語となった過程をいう。その過程には、「名」と「実」という二つの面がある。すなわち、「名」としては、Education の訳語となる「教育」の成立であり、「実」としては、「教育」の下位概念である「三育」の導入である。ここで、国際的視野に立ち、その過程を究明しておきたい。

一 「教育」という訳語の成立

（一）清末中国における Education の訳語

英語 Education（フランス語 Éducation、ドイツ語 Erziehung）は、ラテン語の Educare に語源を持ち、本義は導出・引出などである。そこから派生した意味が養育・教授などである。洋学伝来の際、Education という言葉が漢字文化圏に伝わり、いろいろな訳語が当てられた。最終的に、「教育」が基本的訳語として確立し、さらに教育学の中核的な術語になっていった。その過程は、大体次の通りである。

1 教学 これは、漢字文化圏における Education の最初の訳語であり、馬礼遜（Robert Morrison, 1782-1834）の『華英字典』第6巻（1822年）に見られる。その後、他の宣教師の手による英華字典にも採用された。それらの字典の中で採用された、Education および関連英語の語彙の訳語は、次頁の表1の通りである。

表に見られるように、Education の訳語として共通して「教学」が当てられていることがわかる。ただ、それらの字典には専門的な教育学の説明がないため、ここでの Education と関連訳語は一般用語であり、専門用語ではない。

1856年、香港英華書院は、『智環啓蒙塾課初歩』という訳書を刊行した。その第6篇の原著タイトルは、*Of Education* であり、「教学論」と訳された。その篇では、もっぱら「学館」（School）・「学習」（Learning）・「童子玩耍」（Plays of Boys）および「女仔玩耍」（Plays of Girls）といった学校教育のことを論じている。ゆえに、ここの「教学」（Education）は、最初の教育学の専門用語の用例と見なすべきである。

表 1 早期英華辞書における Education 訳語

字典名	作者名	「Education」とその関連訳語	出版年
華英字典 (卷三)	馬礼遜	EDUCATION, 教学 Education of youth, 教順幼少	1822
英華韻府歷階	衛三畏	Educate, 教訓 Education, 教学	1844
英華字典 (卷一)	麦都思	To educate, 教養, 育, 毓; to teach, 教訓, 教習, 教導, 教管, 教誨 Education, 教学, 教道; education of youth, 教訓幼少	1847
英華字典 (卷二)	羅存德	Educate (to bring up) 養育, 教養, 教育, 育; (to teach) 教, 教訓, 掌教, 教導, 教誨, 教化, 開化, 開導, 教習 Educating (instructing) 教養, 教育, 養育 Education (the bringing up, as of child) 養者, 育者; (instruction) 教者, 教訓, 教学; (the course of education) 教之道; (the education discipline) 教法; (the education of children) 仔女之教訓, 子女之教育	1867
華英字典集成	鄺其照	Educate, to, 教養, 育, 教; Education, 教学, 学, 教育	1868
英華萃林韻府 (卷一)	盧公明	Educate, 教訓, 教養, 讀書, 教示; Education, 教学, 教道; youth of 教訓幼少	1872
增訂華英字典集成	鄺其照	Educate, to 育, 教, 教養, 教誨; Education 教習, 学, 教育	1887

2 教化 1875 年、ドイツ人宣教師の花之安 (Ernst Faber, 1839–1899) による『教化議』が刊行された。これは、中国の教育改革を論じるものであり、5 巻に分けて、「養賢能」「正學術」「善家訓」「正學規」「端師範」という五条の建言を述べている。この本で使われている「教化」という語は、Education の訳語と見なすことができる。

3 肄業 1882 年、顔永京が訳した『肄業要覽』が出版された。これは、中国人による西洋近代教育学の最初の翻訳書といえるであろう。原書は、スペンサー (Herbert Spencer, 1820–1903) という英国の著名な哲学者が著した *On Education* の第 1 章「What Knowledge is of Most Worth?」である。タイトルに使われている「肄業」は、Education の訳語であることは間違いない。そして、1904 年に出版された宣教師による *Technical Terms, English and Chinese* でも、「肄業」という訳語を（「学校」とともに）採用している。¹

4 文学 1896 年 5 月、上海広学会は『中東戦紀本末』を出版した。その附録に『文学興国策』がある。『文学興国策』は、アメリカ人宣教師の林樂知 (Young J. Allen) と清国士人の任申茂 (廷旭) によって翻訳された。原書は *Education in Japan* である。1872 年初め、駐米日本代理公使の森有礼は、アメリカ教育界の有識者に手紙を送って日本の教育改革について意見を求めた。翌年、森は、受け取った 13 通の返信を 1 冊にまとめて、D. Appleton and Company (New York) に持ち込んで出版した。それが *Education in Japan* である。また、森は 13 通の返信を、自分の蒐集したアメリカ教育資料と一緒に日本政府に提出した。さらに日本語に翻訳するつもりであったが、実際には、未完のまま頓挫している。『文学興国策』は、*Education in Japan* の中国語訳であり、「文学」という語は Education の訳語である。

5 教育 この訳語は、羅存徳の『英華字典』と鄺其照の『華英字典集成』に見られるが、

1 *Technical Terms, English and Chinese*. Prepared by the Committee of the Educational Association of China. Shanghai: Printed at the Presbyterian Mission Press, 1904, p. 144.

近代教育学の中核的な専門用語として、明治日本で成立し、そこからさらに中国に伝わっていったものである。

(二) 明治日本における訳語「教育」の成立

日本で、Education の訳語として「教育」の語が初めて見られるのは、『英和对訳袖珍辞書』の増補改訂版である。この辞書は、堀達之助という徳川幕府直轄の洋書調所の教授が箕作麟祥らの協力の下で編纂したものであり、1862年に江戸で刊行された。後に、堀越亀之助によって増補改訂され、1866年に完成し、翌年江戸で刊行された。さらに1869年、東京の藏田屋清右衛門によって復刊された。Education の訳語について見ると、1862年初版の246頁においては「養ヒ上ルコト」、1867年の増補改訂版の123頁においては「教育スルコト」と記されている。この改訳は、羅存徳の『英華字典』の影響ではないかと考えられている。

西洋近代の学問・教育システムの導入に伴って、明治日本人は、Education の訳語として、「文学」「学」「学問」「教」「教導」「教学」など、たくさんの言葉を当てた（または使用された）。周知のように、そのうち、「教育」が際立って使用され、定着していった。『英和对訳袖珍辞書』をはじめとする英和辞書が言語学的基盤となったこともあるが、学界や政界で影響力を持った人物および重要なテキストが次々と「教育」という語を使ったためである。さらに、近代学制の成立と近代教育学の専門書の翻訳・著述によって、「教育」が専門用語として定着していったと言えるだろう。

近代学制の成立の点からみれば、明治政権内部で、いち早く近代的意味で「教育」を題名に使って建言書を出したのは木戸孝允である。1869年、旧暦の12月2日、木戸は「普通教育の振興を急務とすべき建言書案」を提出した。そして、明治政府は、初めて「教育」を題名にした教育文書「教育令」を出した。この「教育令」は、1877年に起案され、1879年9月29日に太政官第40号布告として頒布された。

近代教育学の専門書の翻訳・著述という点から見れば、近代教育学の専門用語として「教育」が初めて使用された例は、1870年の夏に尚古堂（東京）から刊行された小幡甚三朗訳『西洋学校軌範』（全2冊）である。その上巻の「開篇」は「教育論」と題されている。そして、「教育」を書名に使った近代的教育についての初めての訳書は、1875年2月に文部省から出版された西村茂樹訳『教育史』（上下2冊）であろう。その原書は、アメリカ人の Linus Pierpont Brockett (1820–1893) が著した *History and Progress of Education* の1869年版である。同年11月、大橋淡が口訳し、黒沢宗明が筆記した『波氏学校教育説』も太平学校（秋田）から刊行された。その原書は、アメリカ人 John Seely Hart (1810–1877) の著した *In the School-room: Chapters in the Philosophy of Education* である。

1881年、井上哲次郎らが編纂した『哲学字彙』は、東京大学三学部によって刊行された。これは、明治日本の人文・社会学分野に強い影響力を持った専門的辞書である。その中では、Education の訳語として、「教育」が使われている。続いて、1882年から1885年にかけて、小林小太郎・木村一歩訳『教育辞林』が、文部省編輯局から出版され、翻訳は

1879年に完成した。この辞林は、日本ないし漢字文化圏における最初の近代的教育学の専門辞書といえるであろう。その原書は、アメリカ人の Henry Kiddle (1824-1891) と Alexander Jacob Schem (1826-1881) が編纂した *The Cyclopaedia of Education: a Dictionary of Information for the Use of Teachers, School Officers, Parents, and Others* (New York, 1877) である。

(三) 清末中国における「教育」の定着

上述したように、清末中国において、Education の訳語はさまざまであり、定まっていなかった。「教育」も訳語の一つに過ぎず、近代の専門用語としては定着していなかった。

1889年、清朝派遣海外考察官僚の傅雲龍によって編纂された『遊歴日本図経』が、東京で刊行された。その廿八『日本文征一』の中に「黎庶昌教育会演説」が収録されている。これは、日本製の「教育」が中国に紹介された最初の例であろう。

日清戦争後、とりわけ清末「新政」期の中国において、いわゆる「西学東遊」（日本を通して洋学を学ぶ）ブームが巻き起こった。姚錫光の『東瀛学校挙概』（1899年に北京で刊行）、羅振玉の『扶桑兩月記——附日本教育大旨・学制私意』（教育世界出版社、1902年3月）、呉汝綸の『東遊叢録』（日本三省堂、1902年10月）など、日本教育考察記（日本の教育を考察した書籍）が数多く刊行された。それらの考察記の中には、日本製の「教育」があちこちで使われている。

しかし、中国において、専門用語として「教育」を定着させたのは、何とんでも『教育世界』という雑誌であろう。『教育世界』は、1901年5月に羅振玉・王国維らによって上海で創刊され、停刊となる1908年1月までに、166号まで出版された。本誌は、中国における最初の実用教育の専門誌であり、当時の民間雑誌の中で、発行期間・発行部数ともに最長・最多で、大きな影響力を持っていたことは言うまでもない。その第1号に掲載された「教育世界序例」の中で、「此雑誌所記各学教科書多採自日本」（この雑誌で記すところの各学の教科書は多く日本より採る）と、羅振玉が述べている。ゆえに、『教育世界』は「西学東遊」への「入口」の一つといえる。中国で日本語から翻訳された最初の実用教育の専門書である『教育学』は、『教育世界』第9-11号（1901年）に連載された。訳者は王国維であり、原書は、日本人の立花鉄三郎が東京専門学校邦語文学科の講義内容をまとめた『教育学』である。

1903年の旧暦7月、上海文明書局は、汪榮宝・葉瀾編纂の『新爾雅』を刊行した。これは、近代中国人の手による最初の専門辞書であろう。その第4章の『釈教育』のなかで、次のように述べている。

教育一語、在吾国古訓、教者、効也、育者、養也。拉丁語為 Educere、即造作之意。英、法、德語、皆導原于此、而其意亦同。研究教育之原理規則、而供其实用之一科学、謂之²教育学。

2 汪榮宝・葉瀾編纂『新爾雅』、上海：文明書局1903年、51頁。

すなわち、「教育」という語は、わが国の古訓によると、「教」は「効」であり、「育」は「養」である。ラテン語では *Educere* といい、造作という意味である。英語・フランス語・ドイツ語はみなこれに起源を持ち、その意味もまた同じである。教育の原理・規則を研究して、その実用を提供する一つの科学は、これを教育学という。「教育」が専門用語として中国の専門辞書に姿を現した最初の例であろう。

二 「三育」概念の受容

1693 年、英国の著名な哲学者のジョン・ロック (John Locke, 1632–1704) は、その著書 *Some Thoughts Concerning Education* の中で、初めて心身二元論に基づいて、Education 概念を moral education、intellectual education、physical education という三つの面に分けて論じている。その考え方は、後世の教育論者に継承され、さらに発展して今日まで続いている。

(一) 明治日本の場合

「教育」が Education の訳語になり、さらに近代教育学の中核的な専門用語になると同時に、その下位概念の「三育」も受容されていった。近代的「三育」概念は、日本に伝来した後、さまざまな訳語を当てられている。その訳語の成立過程は、大体表 2 の通りである。

そのうち、伊沢修二の『教育学』は、単なる翻訳ではなく、日本人ないし漢字文化圏の人の手による最初の近代的教育学書と言ってもよいだろう。その中で、今日でも通用している「徳育・智育・体育」という「三育」の訳語が、最初にセットで用いられている。そして、普及舎の『心理教育論理術語詳解』にいたっては、日本人ないし漢字文化圏の人の手による最初の教育に関連する専門用語辞書と言うべきものであろう。そこにも、同じく、「徳育・智育・体育」という「三育」の訳語が、セットとして使われている。ここで、よく見ると、『術語詳解』の例言に、「本書ニ編述スル所ノ訳語ハ」伊沢修二の『教育学』など「書類中ヨリ引用セリ」³と記されていることに気がつく。『術語詳解』の採用した「三育」の訳語は、伊沢修二の『教育学』に基づいたものといってよいだろう。

(二) 清末中国の場合

中国で、最初に「三育」概念について言及したのは、宣教師の花之安が著した『教化議』(1875 年)であろう。その巻二「正學術」には、次のようにある。

養身・養心・養学三者、其理一。養身之法、幼則哺之以乳、長則食之以肉。養心之法、初以顯淺之道開之、勿責以所難、因其是非之心有未至。養学之法、先由五

3 普及舎編『心理教育論理術語詳解』、東京：普及舎 1885 年 12 月、「例言」。

表2 明治日本における「三育」の成立

順番	書名	訳者 作者	「三育」の訳語	出版者 出版年月
1	教導説（上篇）	箕作麟祥	道ノ教（道教） 心ノ教（智心教導） 体ノ教（身体教導）	東京：文部省 1873年9月
2	教育史	西村茂樹	修身学（道德学） 心理学（智学） 健全学（養成学）	東京：文部省 1875年
3	斯氏教育論	尺振八	道德教育（品行教育） 心智教育 体躯教育	東京：文部省 1880年4月
4	小学校教員心得	文部省	道德教育 智心教育 身体教育	東京：文部省 1881年6月
5	小学教育新編	西村貞	道德教育 心智教育 身体教育（体育）	東京：金港堂 1881年
6	家計原論	篠田正作	心教、智教、体教	東京：中近堂 1882年4月
7	教育学	伊沢修二	精神上ノ教育 德育 智育 身体上ノ教育（体育）	東京：白梅書屋 1882年10月-1883年4月
8	教育学	浅野桂次郎	心上ノ教育（心育） 道德上ノ教育（道育） 智慧上ノ教育（智育） 体上ノ教育（体育）	東京：競英堂 1883年10月
9	教育学	土屋政朝	德育、智育、体育	東京：辻謙之介 1883年11月
10	教育辞林	小林小太郎等	道德教育、知力教育	東京：文部省編輯局 1882-1885年
11	咪氏教育全論	河村重固	道德教育 才智教育 身体教育	東京：文部省編輯局 1885年7月
12	心理教育論理 術語詳解	普及舎	德育、智育、体育	東京：普及舎 1885年12月

官所能及、即見聞事、明乎見聞、然後及於心思。⁴

すなわち、「養身・養心・養学という三者の理は一つである。身体を育てるには、幼少であれば乳を飲ませて、年長であれば肉を食べさせる。心を育てるには、最初のうちは分かりやすい道理を用いて啓蒙し、難しいことを要求してはならない。その是非判断の能力がまだ十分ではないからである。知を育てるには、まず五官が感じるままを見聞させ、次にその見聞を明らかにして、そこから考えさせるべきである」、という。ここでいう「三養」

4 花之安著『教化議』、羊城（広州）：小書会真宝堂 1875年、16頁。

は「三育」に等しい。「養身」はすなわち「体育」、「養心」は「德育」、「養学」は「智育」であろう。

『教化議』は出版後、日本に紹介され、大井謙吉が訓点をつけた翻刻版が1880年10月に東京明経堂から刊行された。

1882年に刊行された、顔永京訳『肄業要覧』の原書は、*Intellectual, Moral, Physical* という「三育」を論じたものであるが、訳されたのはその原書の第一章だけであって、「三育」には直接言及していない。ただ、原書の影響を受けており、訳者は以下の注釈で心身二元論に基づく近代的 Education（肄業）観を明確にしている。

按西士身具有形之肢体、肢体各有其用。心有無形之心才、心才亦各有其用。肢体不止一、心才亦不止一。心才之要者、即悟、視、聞、臭、嘗、摸、記、像、思、度、断等。養身衛身之計、即衣食習武藝練心才之計、即肄業⁵。

つまり、「西洋人は次のように考えている。身体は目に見える肢体を持ち、肢体には各々その役割がある。心は目には見えないが知覚を持ち、知覚にもまた各々その役割がある。肢体の役目は一つにとどまらず、知覚も一つにとどまらない。知覚の要とはすなわち直感、視覚、聴覚、嗅覚、味覚、触覚、記憶、想像、思考、度、判断等である。養身衛身とは、すなわち衣食について学ぶこと、武芸で鍛錬すること、知覚を育てることであり、すなわち肄業である」、と。ここでの「心才之要」「心才之計」は精神教育を、「養身衛身之計」は衛生と体育を意味しているのである。

「教育」と同じく、「三育」も主として日清戦争後に日本から中国に紹介されたものである。その詳しい経緯を見てみると、先述した中国人が記した日本教育考察記がもとになっているようである。前述の姚錫光の『東瀛学校挙概』（1899年）では、次のように述べられている。

錫光窃案、日本教育之法大旨、蓋分三類、曰体育、曰德育、曰智育。故雖極之盲啞、推及女子、亦有体操、重体育也。言倫理、言修身、在德育也。凡諸学科、皆智育也。⁶

すなわち、「私が思うに、日本教育の法の大旨は、大きく三類に分けられる。それは、体育、德育、智育である。盲啞に、さらに女子にも求めることになるが、体操または体育を重んじる。倫理、修身というのは、德育にあたる。およそ諸学科は、みな智育にあたる」。

また、呉汝綸の『東遊叢録』（1902年10月）も、「教育分三種、一体育、二智育、三德育」（教育は三種に分かれる。一は体育、二は智育、三は德育なり）と述べ、さらに幼稚園から高

5 顔永京訳『肄業要覧』、袁俊徳編『富強斎叢書続全集・学制』、小倉山房1901年、1頁。

6 姚錫光編『東瀛学校挙概』、北京1899年、19頁。

校までの各段階における「三育」の課程とその科目を記している（表3）。⁷

表3 吳汝綸『東遊叢録』における日本教育段階とその「三育」

教育段階	体育	智育	德育
幼年部	衛生清潔之事、遊戲、手工	誦読、習字、佛語、歴史、地理、 計算、図案、理科博物初歩、唱歌	修身
初等科	同上	誦読、習字、佛語、歴史、地理、 法制、算術、幾何学、図案、理科	修身
中等科	衛生清潔之事、遊戲及体操、 兵式体操、手工	博物初歩、農業及園芸中等高等科	修身
高等科	同上	並同	修身

このほか、『東遊叢録・学校図録・三島博士衛生図説』の中に、三島講座に使用された図も収録されている。次頁の図はその一部であり、「教育」と「三育」の関係を表している。

日本教育考察記のほかに、「三育」を中国へ伝えたものとして、教育学関係の訳書がある。前述の王国維訳『教育学』（1901年）の中では、「教育」を「身体上教育」と「精神上教育」に区別する。その第二編第一・二章の所論によると、「身体上教育」は「体育」、「精神上教育」は「心育」と省略し、さらに「心育」を「知識之教育」と「実行之教育」に分けて、前者を「智育」、後者を「德育」と省略している。清末から民国初期にかけて、このような教育学に関する訳書は多数あり、そのうち、「三育」について言及した書籍のほとんどで「德育・智育・体育」という言葉が使われている。

1903年の旧暦7月に刊行された汪榮宝・葉瀾編纂の『新爾雅』は、「三育」について以下のように述べている。

陶冶人之德性、而使躬行实践者、謂之德育。發達人之身体、而使堅強耐勞者、謂之体育。增長人之知力、而使見理名透者、謂之智育。⁸

すなわち、「人の徳性を陶冶して躬行実践させるは、これを德育といい、人の身体を發達させて堅強耐勞にならしめるは、これを体育といい、人の知力を増長させて明透に理を見させるは、これを智育という」と。

このように「德育・智育・体育」という「三育」は、専門辞書で成立したが、辞書にとどまらず、政府が發布する公文書でも使われるようになった。1903年の旧暦11月に頒布された張之洞らの手による『学務綱要』の第一条に、「外国学堂于智育・体育外、尤重德育、中外固无二理也」⁹（外国学堂は、智育・体育の他、尤も德育を重んじ、中外とも固より二つの理無きなり）とある。

1903年が、「三育」にとって画期をなす年であることは明らかである。この年をもって、「德育・智育・体育」という「三育」の言葉・概念が、専門書、専門辞書、さらに公文書

7 吳汝綸編『東遊叢録』、東京：三省堂1902年10月、「文部所講」85-87頁。

8 前掲汪榮宝・葉瀾編纂『新爾雅』、53頁。

9 舒新城編『中国近代教育史資料』、北京：人民教育出版社1961年、199頁。

にも定着したのである。

おわりに

要するに、「教育」はもともと用例の多くない一般用語であったが、Education と出会い、その近代化が始まってから、専門用語になり、近代的「三育」の概念が含まれるようになったのである。そして、その過程は文化交流によって展開・完成したのである。近代的 Education が西洋から中国、西洋から日本へとそれぞれ伝わり、そしてその訳語にあたる「教育」が日本から中国へと伝わる、という三つのルートを通じて展開したのである。

